

「あ！萌え」の構造：序論

(4)

応用人間科学研究科 齋藤清二

15. 「カップ焼きそば現象」について 前回のおさらい

前回、「萌え」と「恋愛」は異なるのか同じなのかという問題について論じているはずが、いつの間にか「カップ焼きそば現象」についての議論になってしまった。もちろん、本来ならば再度「萌え」の話題に戻すべきであるのだが、そこで戻さないのが私のやり方なのである...とは言っても、もう前回のことなど忘れている人が多いだろうから、再度「カップ焼きそば現象」のオリジナルな定義 (by 南千秋、齋藤により修正) を掲げておく。

「焼きそばを食べたい時」と「カップ焼きそばを食べたい時」は違う。これらは既に

別の食べ物である。「カップ焼きそば」は「焼きそば」に近いものだが、焼きそばに勝ってもいないし負けてもいない。これを「カップ焼きそば現象」と呼ぶ。

加えて、南千秋によって「カップ焼きそば現象」の実例としてあげられている三つの現象を以下に示す。

1) 「焼きそば」に対する「カップ焼きそば」

2) 「くま」に対する

「ふじおか (くまのぬいぐるみ)」

3) 「新茶」に対する

「ハルカが入れたお茶 (実は古いお茶)」

最初の、「焼きそば」に対する「カップ焼きそば」の例については、前回既に詳細に

論じた（え、ちっとも詳細じゃないって、まあそうとも言うが、それはちょっとおいておく…）。その結論を以下に再度簡単にまとめておく。

カップ焼きそば現象とは、“AとBは、同じものではないが、異なるものでもない”というAとBの関係を表すような現象である。

さらに、A=萌え、B=恋愛をこの図式に代入して言い換えると、「萌え」と「恋愛」の関係は、以下のようになる。

「萌え」と「恋愛」は同じものではないが、異なるものでもなく、それは「カップ焼きそば現象」の一種である。

以上が、前回の議論の要約である。さあここからさら議論を続けて行こう。（「え、またですかあ」なんて声が聞こえるが、私は気にしないのだ）

一応、分析の対象となっているアニメのURLを再掲しておく。

<http://gyao.yahoo.co.jp/player/00252/v10080/v099340000000542672/>

16. 「くま」と「ふじおか」について

「カップ焼きそば現象」の二つ目の例としての「くま」と「ふじおか（くまのぬいぐるみ）」は、一見して分かりにくい。いったいこれが、前の例とどこに共通点があるのだろうか？ 千秋は言う。

例えば、私のこのくまのぬいぐるみ。くまに似てはいるが、決してくまではない別のもの。「ふじおか」という名前まである。

千秋によれば、これが日常的にある『カップ焼きそば現象』の一つの例であるという。しかし、それを聞いている冬馬（南家おかえりの登場人物の一人。千秋と同じ学年のボーイッシュな少女）にはさっぱり分からない。

実際アニメの中では、登場人物の一人であるタケルおじさん（実際には南家三姉妹の従兄）が、くまのぬいぐるみである「ふじおか」の前に一人で座って、悩み事をぶつぶつと語っているところを見て、千秋がそれを「あれも『カップ焼きそば現象』のひとつだ」と説明するのである（描写が分かりにくいのはご容赦。実は南家の登場人物の相互関係については、筆者は不勉強である）。しかし、その説明を聞いた冬馬は、さらに混乱する（まあ、当然ではある）。

筆者も、千秋の説明の意味がすぐに分かるわけではないのだが、ここでは「千秋が変なことを言っている」と考えるのは質的研究者の正しい在り方ではない（←いつから質的研究者になった？）。そうではなくて、「千秋がそう言っているというデータがあるのだから、きっとそれを説明できる理論があるはずだ」と考えるのが正しい態度である。そのような態度をとることができる能力（性質）を、グレーザーと

ストラウスは「理論感受性 theoretical sensitivity」と呼び、グラウンデッド・セオリー・アプローチをはじめとする質的研究を実践する研究者には必須の能力であるとした（らしい）。もちろん、この能力は「妄想感受性 delusional sensitivity」と呼び変えることもできる（これはグレイザーとストラウスが言っているわけではない）。

私達がここですべきことは、このシーンにおいては「カップ焼きそば理論」が実際に働いているとの想定に基づいて、「くま」と「ふじおか」の関係についての意味の解釈を探求することである。この作業は「くま」と「ふじおか」とその関係という具体的な例と、「カップ焼きそば理論」という抽象的な理論の間を、循環的に往還しながら解釈を勧めるという作業になる。このような活動は、どちらかがどちらかを因果的、直線的に説明したり、規定したりということとは全く違って、解釈学的循環などと呼ばれている（らしい）。別な言い方をすれば、理論から演繹的 (deductive) に実例を解釈するのではなく、実例から理論を帰納的 (inductive) に作り上げるのではなく、その両者を縦横無尽に駆使することを通じて、新しい発想を abductive に創造することを目指すということである。

前項で確認したように、カップ焼きそば現象とは、“AとBは、同じものではないが、異なるものでもない”というAとBの関係を表すような現象である。そこで、A=くま、B=ふじおか、を

代入してみると、「くま」と「ふじおか」は同じものではないが、異なるものでもない、ということになる。しかしここで、千秋は「『ふじおか』はくまに似ているがくまではない」と喝破する。つまり、ここまでとてもややこしい話を延々と続けてきたが、ひとつの結論は、「カップ焼きそば理論」とは「相似」という抽象化された概念についての一つの説明であるということが分かる。これが、「カップ焼きそば現象」としての第二の実例である「くまとふじおか」を詳しく分析したことによって浮かび上がった一つの成果である。なーんだ、そんな単純なことだったのか、と読者は言うだろう。しかしこの議論がややこしく感じられるのは、実はいくつかの問題点が一緒に重なっているからでもある。

まず、くまのぬいぐるみに「ふじおか」という固有名詞がつけられているということが事態を複雑にしている。これを、「くま」と「ぬいぐるみのくま」は同じものではないが、異なるものでもない（つまり相似である）、ということの一例なのだとして論ずるならば話は少しすっきりする。「焼きそば」と「カップ焼きそば」の関係と、「くま」と「ぬいぐるみのくま」の関係を比較すれば、この両者の関係はほぼ同じである。しかし、どこにでもあるくまのぬいぐるみではなく、「ふじおか」という固有名詞によって命名されていることで、このくまのぬいぐるみは、俄然個別性を帯びてくる。

確かに、もし実際に一頭のアラスカ

熊を南家に連れてきて、そのくまとふじおかを並べてみれば、くまとふじおかはある意味対等である（実際に台所でフライパンを使って焼きそばを作り、それとペヤングのカップ焼きそばを並べて食卓に出した状況を想像してほしい）。しかし、それは現実的ではない。くまのぬいぐるみを家庭におくことはできるが、アラスカ熊を家庭に飼っておくことはできない。ここが、焼きそばとくまの違うところである。

「ふじおか」と名付けられたくまのぬいぐるみを、アラスカ熊と対等なべつなものであると思う人は少ないだろう。この南家のシーンでも、くまは現実にはそこにいない。いるのは、「くま」に似ている「ふじおか」というぬいぐるみ人形だけである。それでは、タケルはなぜ、「ふじおか」に話しかけているのか？ このような疑問を生じさせることも、このシーンの理解を複雑にしている理由の一つである。タケルは「ふじおか」に悩みを打ち明けることによって、（実際には「ふじおか」は何も応答しないにもかかわらず）一種の癒やしを得ているらしい。これは「ふじおかというぬいぐるみ」の働きなのか、あるいは「ふじおか」の背後に存在する「くま」の働きなのか、あるいはそれは別に特定のくまのぬいぐるみでもなんでもなくて、黙って話を聞いてくれる（ように見える）ものならばなんでもよいのか。それは、現実には話を聴いてくれる特定の誰かの代理物なのか？

話は突然跳ぶが、この世界には俗に

いうカウンセラーとか心理療法家とか臨床心理士などという人種がいて、彼らは一応専門的な訓練を受けており、悩みをもったクライアントの役にたつために一生懸命その役割を果たすのが仕事である。彼/彼女らの仕事とは何かといえば、自分から何かを話すのではなく、ただひたすらクライアントの話すこと（最近ではちょっと洒落て”物語”や”語り”などともいう）を聴くのである。さすがに最近では、何にもしないでただ聴いているだけではだめだと言われることが多くなり、色々みたてをしたり、専門的な技法で介入したりもすることが必要だと言われるようになってきてはいるが、それでもカウンセリングの基本が傾聴であることに変わりはない。それでは、カウンセラーが一生懸命傾聴すると、なぜクライアントは癒やされるのか？ 自分からは何も語らず、ただ聴いているだけなら、それはロボットや人形や、くまのぬいぐるみ（や鯛の頭）でも良いのではないのか？ これは当然の疑問であろう。

こういう疑問を向けられると多くの人は、「それはもちろん、生身の人間同士の関係性が大切なのであって、ロボットや人形じゃあだめですよ、はっはっは（乾いた笑）」と言うのであるが、でも、それって本当に本当なのか？ 生身の人間に話を聴いてもらいながら話すのと、くまのぬいぐるみに向かって話すのとでは、本当にその効果は違うのか？ 実は、この疑問に正確に答える実証的な研究結果（エビデンス）は

ない。その理由は、そもそもくまのぬいぐるみに向かって真剣に悩みを話すなどというシチュエーション（実験群）と、それと見分けがつかず当事者にはどちらかわからないが実は何もしていないような状況（統制群）を人為的に設定して、無作為割り付け試験で効果の差を見るなどという研究がデザインできないからである（もしできるという人がいたら、ぜひやってみてほしい）。しかし、もし本当にそういった体験をするクライアントがいるとしたら（経験的にはまちがいなくいる）、そして南家に訪れたタケルがくまのぬいぐるみのふじおかに向かって自分の悩みを話すことによって癒やされたとするなら、その時彼らを癒やしているものはいったいなんなのだろうか？

想像を強引に膨らませてみよう、もし「ふじおか」が「くまのぬいぐるみ」ではなくて「仏像（例えば阿弥陀如来）」であり、タケルが深く仏教を信仰している人だとしたら、タケルが仏像に向かって座って何か（例えば波阿弥陀仏）を唱えているだけで、そこで何か癒やしに近いことが起こる可能性はあるのではないだろうか。もし「ふじおかが」ぬいぐるみではなくて、なんらかの萌えフィギュアであって、タケルがそのフィギュアに超萌えているオタクだったとしたら、さらには「ふじおか」が実際にイヨマンテの熊であり、タケルが熊を神として信じている（縄文時代の？）人間だったとしたら、そこに似たようなことが起きる可能性はないだろうか。もしこれらの状況において、

なんらかの癒やしと呼べるような体験が生じるのだとしたら、それを引き起こしているものはいったいなんなのだろうか。

この南家に起こったできごとに限って言えば、「ふじおか」の背後にあるものは、おそらく「ふじおかのもつくまの形相」と無関係ではない。タケルがイヨマンテの熊に対して畏敬の念をもっているかどうかは分からないが、そこにあるものはもちろん現実のくまではなくて、ふじおかの持つ「くま性 = bear-ness」とでもよぶべき、実体をもたない抽象的な性質であると思われる。ここで再度、「ふじおか」と「くま」の関係が、「カップ焼きそば」と「焼きそば」の関係と等価であったということを出してほしい。カップ焼きそばと焼きそばは同じものでもないが違うものでもない。しかし、「ふじおか」と「くま」の関係を見た時に、さらにもうひとつの関係を付け加える必要がある。それはふじおかという個別のものと、ここには現実には存在しないがふじおかのもつ性質である「くま性」の関係である。個別で具体的なものである「ふじおか」はくま性をもつが、くまが「ふじおか性」をもつとは言えない。つまり、ふじおかとくまは相互に入れ替えることが不可能なのである。そして我々は、個物であるふじおかを通じて、普遍的なくま性に触れることができる。ふじおかは広い意味ではくまの一種である。しかし、くまそれ自体は（少なくとも“今ここ”では）見ることも触れることもできな

い。ここでの「くま」は、実体を持たない抽象的な「くま性」であり、しかしタケルも我々も、少なくとも今ここにおいては、「ふじおか」を通じてしかその「くま性」に触れることができないのである。

ここまで論じてくると「ふじおか(くまのぬいぐるみ)」と「くま」との関係、そして、その関係と「カップ焼きそば現象」の関係がようやく明らかになってきた。(え、それでもさっぱり分からないって、まあそれも当然なのであるが)。賢明な読者諸君はもうお気づきのことと思うが、「くま」と「くまのぬいぐるみであるふじおか」の関係は、前回論じたモーツアルトのオペラ魔笛において論じた、「パミーナ」と「パミーナの絵姿」との関係とよく似ている(つまり相似である)。もちろん、パミーナはお話の中の登場人物ではあるが、実体のない抽象的な概念ではなく、あくまでも一人の登場人物としての実体を持っている。しかし、タミーノがパミーナの絵姿に一目惚れした“その”時点においては、パミーナはそこには存在せず、タミーノは「パミーナの絵姿(二次元画像)」を通じてしかパミーナ(あるいはタミーノを魅惑する「パミーナ性」)に触れることができない。「パミーナの絵姿」は、確かに「パミーナの代わり(代理物)」に過ぎないかも知れないが、タミーノが実際にパミーナと出会い、結ばれるために、通常では達成することが困難な試練に挑戦し、堪え忍び、それに打ち勝つために必要な力を与えるものは

この「絵姿」なのである。このことをよく分かっている千秋は、「おじさん、話し相手がほしいんじゃないのか？」と問う冬馬に対してこう断言する。

お前はさっきから何を聞いていたのだ？「ふじおか」は話し相手代わりではない。「話し相手のくま」なのだ！

「くまとふじおか」の事例を分析した結果、前項で述べた「カップ焼きそば現象」および、それと「萌え」の関連についての定義は少し変更(改良)しなければならないことが分かる。改訂版は以下のようなようになるだろう。

カップ焼きそば現象とは、“AとBは、同じものではないが、異なるものでもなく、さらにAとBは相互入れ替え可能ではない”というようなAとBの関係を表す現象である。

「萌え」と「恋愛」は同じものではなく、異なるものでもないが、相互に入れ替えることはできない。それは「カップ焼きそば現象」の一種である。

だいぶ長くなったので、今回はここまでとして、次回はいよいよ、ハルカの入れたお茶をめぐる「カップ焼きそば現象の真髄」にせまりたいと思う(乞うご期待)。